隅田川の復興橋梁に対する架橋当時の人々の印象について

国士舘大学工学部　学生会員　○成田　和生
国士舘大学工学部　　正会員　　二井　昭佳

１．はじめに

（1）研究の背景と目的

隅田川に架かる橋梁群は、様々な橋梁形式が用いられていることから橋の展覧会とも呼ばれ、水上バスの観光の目玉として、非常に人気が高い。それらの多くは関東大震災の際に震災復興事業により架けられたものである。

復興局が担当した136橋のうち隅田川に架けられた6橋には、復興橋梁の総費用のうち約3分の1が費やされている。これらは復興事業の目玉であり、当時最新の技術が投入され、それぞれが異なる橋梁形式で、なおかつデザインに対する配慮もなされている。特に帝都の門として架けられた永代橋や清州橋には、6橋にかけられた費用のさらに半分がかけられていることから、土木技術者たちの特別な思いが込められていると思われる。

こうしてできた隅田川の6橋が、架橋当時の土木技術者たちにとって与えた衝撃は想像にあまりある。その一方で、当時の一般の人々が、どのような印象を持ったのかについてはあまりはっきりしておらず、これまで調査も行われていない。しかしこうしたことは、土木史的にみても興味深いだけでなく、それまでみたことのない構造物が出現したときに、人々がどのような印象を受けるのかを知ることは、今後の設計をおこなううえで有益なことだと思われる。

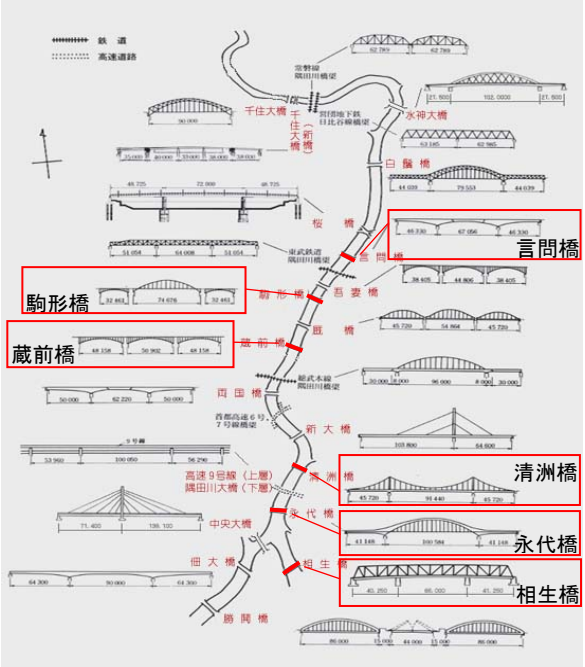
そこで本研究では、当時の雑誌記事や新聞などを用いて、当時の人々が①隅田川6橋に対してどのような印象を持っていたのか、②また橋梁群という見方がいつ頃からなされたのかを明らかにすることを目的とする。

（2）研究の方法

研究の方法は、まず①隅田川に架けられた橋梁群に関する当時の文献等を用いそれらの基礎知識を整理する。その後②復興計画の立案時から、全ての橋梁が竣工する戦前頃（大正 13 年から昭和 5 年頃）までを対象として、当時の新聞や雑誌に掲載された隅田川橋梁群に関する言説を整理した上で、橋梁群に対する当時の人々の印象について考察する。

２．隅田川橋梁群の概要

本研究の対象である隅田川橋梁群の諸元および位置図は以下のとおりである。



図－１　隅田川橋梁群の位置図

表－１　隅田川橋梁群の諸元

橋名	構造形式	幅員(m)	橋長(m)	竣工年月
相生橋	大橋：上路式7径間ゲルバー式鋼鈑桁 小橋：上路式5径間ゲルバー式鋼鈑桁	22.0	大橋：145.97 小橋：45.82	大正15年11月
永代橋	下路式3径間鋼ゲルバー式タイドアーチ	22.0	185.17	大正15年12月
駒形橋	中央径間：中路式鋼アーチ橋 側径間：上路式鋼アーチ橋	22.0	149.62	昭和2年6月
蔵前橋	上路式3径間鋼アーチ橋	22.0	173.17	昭和2年11月
言問橋	上路式3径間ゲルバー式鋼鈑桁橋	22.0	160.03	昭和3年2月
清洲橋	下路式3径間鋼吊橋	22.0	186.73	昭和3年3月

さらに復興事務局によって発行された「帝都復興事業誌」の中で述べられていた、それぞれの橋梁の形式選定についての記述をまとめたものが表－２である。

表－２　橋梁の形式選定についての記述

橋名	橋梁の形式選定についての記述
相生橋	其の地方的状態を考慮すると、特異性なきを可とする
永代橋	隅田川河口を扼し、船運多く、中央径間の大なるを可とし（中略）帝都水路の偉彩たるべき
駒形橋	側径間の拱矢は高からしむることを得ず、勢ひ扁平なる拱形となるから、中央径間は下路型となし、支間の大なると共に、拱矢も高く採つた
藏前橋	地質良好であって（中略）杭打基礎をもって充分信頼し得るから、この両橋いは、いずれも３径間の鋼鈑に鉸肋拱を選定
言問橋	隅田公園に臨んで居るから（中略）風趣を妨ぐることなきを要し（中略）周囲に調和せるの快感を與ふる事
清洲橋	永代橋の上流に平行し（中略）永代橋と対照的位置にあるから、永代橋の上向きなる拱型曲線に対して、下垂線を有する吊橋

キーワード：震災復興橋梁,人々の印象,橋梁群

連絡先：〒154-8515 東京都世田谷区世田谷 4-28-1 国士舘大学 TEL：03-5481-3261 E-mail：g743543k@kokushikan.ac.jp

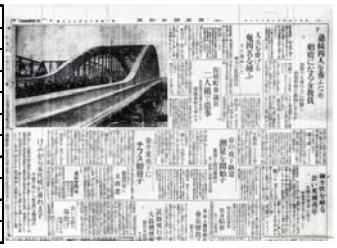
３．当時の新聞、書籍にみる人々の印象

（1）調査対象とした新聞、雑誌および書籍

新聞、雑誌は大正 14 年 1 月から昭和 5 年 12 月まで、書籍は大正 14 年から昭和 20 年までを対象とした。（表－３）、（表－４）新聞記事は朝日新聞に掲載されているものがほとんどで、さらに永代橋、清洲橋に関しては竣工式以外にも記事があったが、他の橋梁に関しては竣工式の様子しか取り上げられていない。

表－３　調査対象とした新聞、雑誌

新聞名	雑誌名
朝日新聞	アサヒグラフ
毎日新聞	週刊朝日
読売新聞	キング
東京日日新聞	雄辯
	婦人倶楽部
	現代
	新潮
	新青年
	サンデー毎日
	平凡



図－２　当時の新聞記事（永代橋竣工式）

表－４　調査対象とした書籍

出版年	書籍名	著者	掲載の有無
大正14	帝都復興号 ： 附・横浜版，上巻	現代通信社編	
昭和2	名勝案内図 ： 東京から一・二泊	鉄道省製	
昭和3	大東京繁昌記 ： 下町編	東京日日新聞社編	●
昭和3	帝都復興事業概観	復興局編	
昭和4	大東京案内	中央公論社編	
昭和5	大東京の史蹟と名所	佐藤太平著	●
昭和5	帝都復興美観 ： 聖上陛下御巡幸記念	歴史画報社	
昭和5	帝都復興記念帖	復興局編	
昭和5	帝都復興完成式典並復興帝都御巡幸写真帖	復興局編	●
昭和5	帝都復興記念写真帖	中川順吉著	●
昭和5	帝都復興秘録	東京市政調査會編輯	
昭和5	大東京写真案内	和泉厚郷著	
昭和6	関東大震災と帝都復興事業	堀切善次郎等著	
昭和6	ポケット大東京案内	綱島定治，小川彦平編	
昭和7	大東京史蹟案内	一高史談会編	●
昭和7	大東京百景	日本風景版画会編	●
昭和7	大東京写真大観	白泉社編	●
昭和7	大東京の現勢	東京毎夕新聞社編	
昭和7	大東京概観 ： 市域拡張記念	東京市編	
昭和7	大東京の全貌	岸田菊伴編	
昭和7	大東京案内 ： 交通詳解，昭和8年版	高谷義重著	
昭和8	大東京新地図	文化地図普及会製	
昭和8	大東京写真案内	博文館編纂部編	●
昭和8	武蔵野から大東京へ	白石実三著	
昭和8	文化の大東京	日浅房太郎編	
昭和8	大東京の全貌	岸田菊伴編	
昭和9	大東京発達史，第1	大東京発達史編纂局編	
昭和10	大東京大観	帝国大観社編	●
昭和11	大東京の魅力	青山光太郎著	●
昭和11	大東京史蹟名勝地誌	地人社編纂	●
昭和11	大東京名所百景写真帖	青海堂	
昭和12	大東京観光アルバム	穂刈三寿雄著	
昭和13	東京府観光新十二ケ月	東京府観光協会，報知新聞社［編］	
昭和15	東京地方	日本旅行協会	
昭和17	大東京写真帖	尚美堂編	●
昭和17	大東京写真帖	至誠書院編集部編	

表－５　橋梁に関するものがあった書籍

	タイトル	相生橋	永代橋	駒形橋	蔵前橋	言問橋	清洲橋
a	大東京の史蹟と名所	×	□	×	×	×	△
b	帝都復興完成式典並復興帝都御巡幸写真帖	×	△	×	×	×	△
c	帝都復興記念写真帖	×	△	△	△	△	△
d	大東京史蹟案内	×	○	×	×	×	×
e	大東京百景	×	□	×	×	□	□
f	大東京写真大観	×	●	○	●	●	●
g	大東京写真案内	×	●	○	○	●	●
h	大東京大観	×	■	□	■	■	■
i	大東京の魅力	□	●	○	○	■	●
j	大東京史蹟名勝地誌	○	■	□	■	■	■
k	大東京写真帖	×	×	×	×	×	△

○：写真と記述　△：写真　□：記述　×：掲載無（黒塗りは橋の印象の有無）

（2）記述内容からみた各橋の印象

1）相生橋

竣工時に「賑やかな渡橋式」と述べられたが、それ以降は印象に関する記述は存在していない。

2）永代橋

「東洋一」「大鐵橋」「全容極めて雄大で隅田川上を爬行する巨姿は帝都の偉彩である（j）」など大きさや迫力を強調した記述がほとんどである。

3）駒形橋

竣工当時の新聞には「遠く望めばにじのやうな美観」と書かれたものの、それ以外には橋の印象についての記述は見当たらない。

4）蔵前橋

竣工時の新聞には写真のみの掲載であったが、竣工後には「平凡な拱橋ではあるが橋面に鐵骨が現れてゐないから豁然として開け、本所側の同愛病院、震災記念堂と相俟つて新東京風景を作つてゐる（h）」に代表されるようにモダンな橋と捉えられていた。

5）言問橋

「スマート」という表現が多く、「隅田公園の風致に合つた、形は單純であるが極めて輕快な姿を見せてゐる（j）」に代表される様にスマートな橋と捉えられていた。

6）清洲橋

「此の橋の持つ單純な曲線美は近代美に富んでゐる（h）」「最も變化に富む美しい橋（j）」など美しさを強調した記述がほとんどである。

（3）橋梁群という見方

隅田川の 6 橋が竣工した頃にはまだ他の復興橋梁ができておらず、一つ一つの橋も距離があったためか、「橋梁群」というような表現はなかった。しかし昭和 8 年に発行された『大東京写真案内』には「隅田川の十大橋」という記述があり、これが橋梁群としての見方を示した最初のものである。その後に発行された全ての文献には橋梁群という記述がみられる。

（4）考察

永代橋には大きさや迫力、清洲橋には美しさという対照的な表現がされていたが、実際は橋長もほぼ同じで、鋼重量は永代橋より清洲橋の方が多い。今回はこの理由についてまではわからなかったがこの違いは興味深い。また言問橋や蔵前橋はいずれも大きな部材で構成されていることが、シンプルやモダンといった好印象を与えていた。現在もシンプルな橋が好まれることにはこうした影響がある可能性がある。最後に橋梁群という見方については、昭和 8 年以降すべての文献にその記述があることから、この頃橋梁群という見方が定着した可能性が高い。

４．結論

架橋当時の人々の印象について当時の文献を整理し、①永代橋と清洲橋の対照性、②言問橋や蔵前橋の好印象の要因、③橋梁群という見方が定着した時期について指摘した。

主な参考文献

1）　中井祐：近代日本の橋梁デザイン思想,2005